

2017S 歴史Ⅱ
「日本の中世社会」
桜井英治

2017S 歴史Ⅱ「日本の中世社会」桜井英治

シラバスより

授業の目標、概要：

現代歴史学の流れは、1970年代前半までの戦後歴史学の時代、70年代後半から80年代の社会史の時代を経て、現在はさしずめグローバル・ヒストリーの時代にあるといえようか。この間に日本中世史研究も関心や視点、方法等をさまざまに変化させてきたが、大きくいえば、日本の中世社会を分裂的、多元的な社会とみる学説と統合的な社会とみる学説を両極として、その間を揺れ動いてきたように見える。この授業ではこれまでの研究成果や論争史をふまえながら、日本の中世社会の特質を日本史全体の流れのなかで、あるいは東アジア諸地域との比較において整理・究明するとともに、今後の研究の進むべき方向性についても模索してみたい。

キーワード：

日本中世史、社会史、比較史、イエ社会、中世法、贈与

講義計画：

- 第1回 序論—現代歴史学の歩み
- 第2回 中世日本の時間的布置 1—時期区分論
- 第3回 中世日本の時間的布置 2—歴史の周期性
- 第4回 中世日本の空間的布置—比較史的考察 」ココまで
- 第5回 イエ支配の独立性
- 第6回 法の多元性
- 第7回 職と荘園制
- 第8回 市場経済と贈与経済
- 第9回 身分と役
- 第10回 中世人のライフサイクル
- 第11回 宗教的世界観
- 第12回 村町共同体の成立
- 第13回 まとめ

1. 現代歴史学の歩み

歴史学の歴史

戦前 皇国史観(右極端)

↓反省

1945～70年代前半 戦後歴史学の時代(左極端)

- ・マルクス『経済学批判』序言に始まるマルクス主義歴史学＝唯物史観
- ・内的発展を重視、一国史的
- ・下部構造(経済)が上部構造(法・政治・文化)を規定する。下部が社会の推進力。
→歴史は経済史を解くことで記述し得る

↓

1970年代後半～80年代 社会史の時代

(注)社会史…歴史研究の一分野。従来の歴史学(作成者注:マルクス主義歴史学)に対して、人間をとりまく生態系や環境を含むすべての日常生活を把握するために、自然科学・人類学・民俗学・人文地理学など隣接諸科学の方法・視点・成果を多面的にとりいれ、人間とその社会を深層から全体的・具体的に分析しようとするもの。(デジタル大辞泉)

ex.心性史、身体史、絵画史、都市史、流通史、貨幣史…

※同時期、偶然に、西洋でもフランス・アナル学派が社会史の潮流を形成

※カルロ・ギンズブルク(伊)による「ミクロストリア」の概念もこの頃現れる

著書『チーズとうじ虫』→一農民が独自に築きあげた宗教的世界観を分析

(注)ミクロストリア…境界などがはっきりと定義された小さな単位を対象とし、集中的に歴史学的な調査・記述を行うことである。多くの場合、ひとつの出来事やひとつの村など小さな共同体、あるいはひとりの個人を対象とする。(中略)ミクロストリアの *micro* は必ずしも観察する対象の規模が小さいということのみを示しているのではなく、むしろ観察する尺度が小さい、つまり細部まで詳細に記述を行うということの意味で使用される (Wikipedia 2017.6.22)

cf.神は細部に宿り給ふ

- ・出版業界に活気があり、一般の読者を巻き込んだ社会史ブームが起こる
- ・西洋史研究を紹介した日本人学者

阿部謹也…ドイツ中世史。神話・伝承に注目した研究

二宮宏之…フランス近世史。理論面での紹介に努める

- ・”戦後歴史学最後の華々しい戦い”→網野善彦『無縁・公界・楽』(1978)
- ・塚本学『生類をめぐる政治』(1983)…生類憐みの令の必然性・非意外性
- ・『社会史研究』全6号(1983~85)
 - …世界史中心の雑誌だが日本史学者も寄稿し、東西社会史交流に貢献
- ・『週間朝日百科 日本の歴史』全133冊(1986~88)
 - …ビジュアル的

1960~70年代、東大・佐藤学派の社会史研究活動

(佐藤史観とも。実証主義・民俗学や文化人類学への関心)

○佐藤進一「東国独立国家論」

…鎌倉幕府は地方政権ではなく国家

○笠松宏至(1967~)「裁判権の分立」「公方の多元性」

…公方の指す対象は将軍、天皇、在地領主など時と場合と話者によって様々。戦国から江戸にかけて意味の淘汰が起こり、最終的に徳川将軍を指すように。

○石井進(1974~)「イエ支配の自立性」

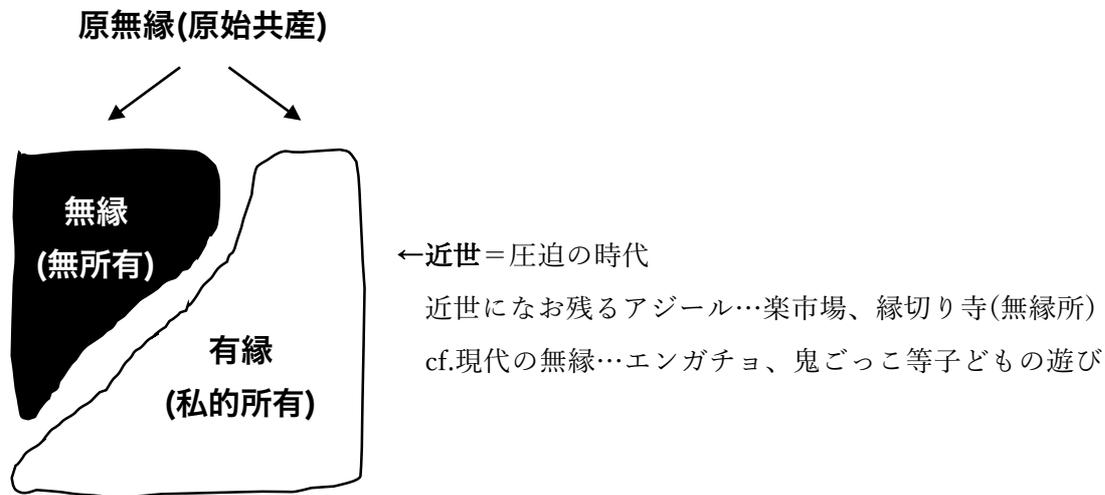
…公家や武家という括りの中に無数のイエという独立国家。主君できさえも主人のやり方に口出しはできない。犯罪人もイエに逃げ込めば主人が引き渡しを拒否する限り捕らわれない。
→人間的、空間的に独立

○勝俣鎮男(1975~)「楽市場」

…戦国大名以前から、慣習的に暴力などが禁止されたアジール。大名はそれをモデルに法整備。

○網野善彦(1978~)「無縁」※マルクスの、ある意味異端児

…『無縁・公界・楽』



↓

現代 グローバルヒストリーの時代

- ・ 一国史の解体 日本史→対外関係史へ 東アジア史の中に日本史を位置付ける
- ・ 「世界システム論」

江口朴郎…マルクス主義

「中心」と「周辺」の概念(ウォーラステインの先取り)

著書『帝国主義と民族』(1954)

ウォーラステイン…マルクス主義と社会史双方の系譜をひく

著書『世界近代システム』(1974)

ブローデル…アナル派の巨頭

山下範久…ウォーラステインの弟子。

アジア中心のシステム論の構築に挑戦中

日本中世史の理解

古代… 統合的 集権的

中世…分裂的・多元的 分権的 ←従来は中世の特殊性が注目されたが、、、

近世…中世より統合的 集権的

近代… 統合的 集権的

《二つの旋律》by 石井進

…中世を「分裂的社会」とみるか「それなりに統合的社会」とみるか、明治以降の論争

東日本の研究者は分裂性・多元性の強さを主張し、西日本の研究者は多元性の上に緩やかな統合が存在することを主張する傾向。

現在は後者の説が有力化してきつつある。←黒田俊夫の権門体制論(1963~)

領主制論

慈円『愚管抄』…同時代史。保元の乱後が”ムサノ世”

新井白石『読史余論』

原勝郎『日本中世史』(1906)…近代以降の中世史研究のあけぼの

石母田正『中世的世界の形成』(1946)…マルクス主義

↓(↑批判)

権門体制論

黒田俊雄…マルクス主義

公家・武家・寺家などの「権門」が対立しつつも天皇中心の国家体制を共に支え合う
社会 ex.武家は守り、寺家は祈る

[黒田理論]

政治体制＝権門体制

宗教体制＝顕密体制(旧仏教)

※鎌倉新仏教は、中世においては単なる新興宗教にすぎない。宗教界を牛
耳るようになるのは戦国時代以降。

経済体制＝荘園制社会＝非領主制論

※武士は中世の主流ではない。

↓(↑批判)

領主制論

佐藤学派…上記参照。

図にして以下のようなものである。

まさに、学問力学(子は親でなく祖父母に似る)に一致した発展を遂げてきた。

領主制論

マルクス主義

1946 石母田

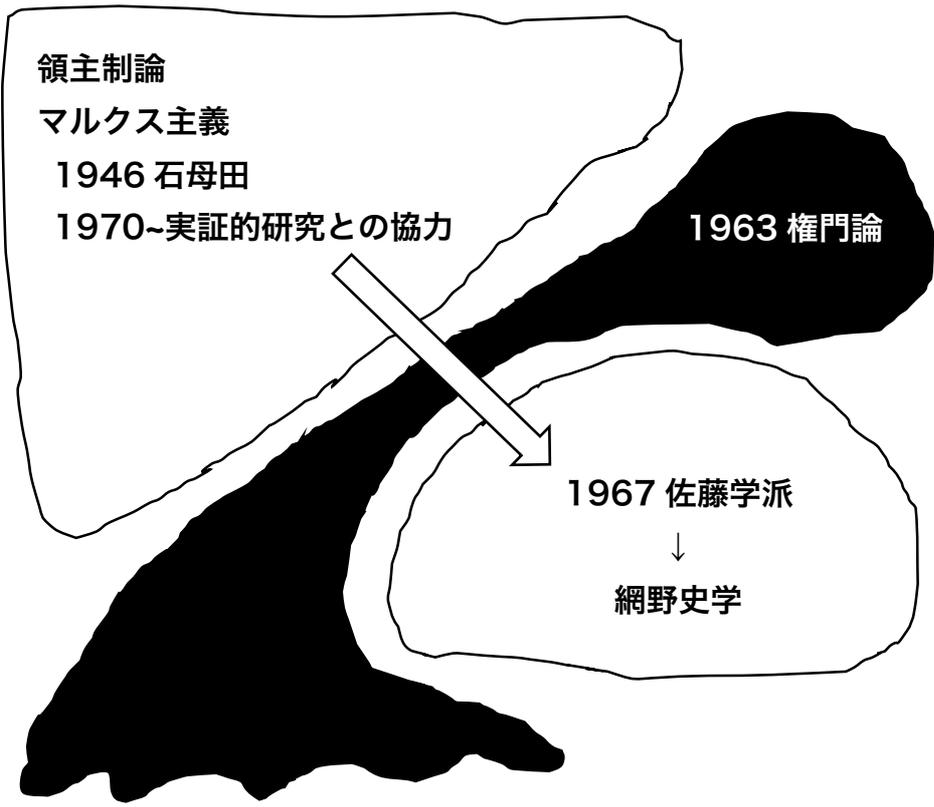
1970~実証的研究との協力

1963 権門論

1967 佐藤学派



網野史学



2.中世日本の時間的布置 1 (発展モデル)–時間区分論

2つの歴史の捉え方

①直線的な歴史(多くは発展モデル) …近代の認識

②反復的な歴史(周期モデル) …原始の認識

認識論ではなく、実在・実際・実体論的に、歴史は①②の複合から成り立っている。

マルクス主義歴史学の発展段階論

(=社会構成史=社会構成体論=生産様式論)

原始共同体

↓

貢納制= アジア的生産様式(総体的奴隷制)…専制構造。
ex.豪族は専制君主、その下の民衆は理論的には奴隷。

↓

奴隷制= 古典古代的生産様式…市民の都市共同体、市民が奴隷を所有。

↓

農奴制= 封建的生産様式…農奴(半奴隷半自由民)による生産活動

↓

資本制= 近代ブルジョワ的生産様式…資本家と労働者の関係。現在。

↓

社会主義社会

日本戦後の近代主義歴史学

大塚久雄[経済学]…大塚史学

マルクスを軸にマックス・ウェーバー(宗教や思想も下部構造)も参照

→マルクスの発展段階論から社会主義社会を除く

イギリス社会を参考に日本の資本主義社会を考察(将来的というより分析的)

丸山真男[政治学]

川島武宜[法学]

日本中世史における社会構成体論

領主制論(石母田正)

マルクス主義歴史学を日本で初めて導入。

総体的奴隷制 = 律令制(～平安)

↓

家父長的奴隷制(平安～鎌倉)

↓

領主制 = 封建制(鎌倉～室町～)

…南北朝封建革命説(松本新八郎)

太閤検地 = 封建革命説(安良城盛昭) ※現在では否定

『太閤検地の歴史的 premise』(1953)

『太閤検地の歴史的意義』(1955)

・領主制 = 封建制への移行は太閤検地である

その時、家父長的奴隷が解放されて小農民(農奴)となった

・中世(戦国まで)は古代に含まれる⇒封建制論争・太閤検地論争・安良城ショック

・否定された要因…ex. 「名」は課税単位ではなくただの徴税単位だった

奴隷労働は効率が悪く、大して発展することはなかった

荘園制 = 封建制説(戸田芳実・河音能平)

封建的概念

①封土を媒介とした主従関係

②小農民(農奴)の成立

←マルクスの定義(①は上部構造、②のような生産に関わることが最重要)

武士が封建制①(御恩と奉公の関係)を創造したことは認める

が、荘園制からも封建制②が生まれた

非領主制論・反領主制論(黒田俊雄)

荘園制 = 封建制説こそ主流

武士が封建制(小農民が発生する環境)を生むことこそイレギュラー

以上を図式化すると、

領主制→封建制 …石母田(・安良城) } 戸田・河音
 荘園制→封建制 …黒田

ただしこれらは、戦後マルクス主義歴史学の内部論争である

以降、「農奴」「封建制」は世界的に死語化してゆく

ex.スーザン・レイノルズ(英)「封建制概念不要論」(1977)

ex.御成敗式目第 42 条に示された「去留の自由」”去留に於いては宜しく民意に任すべし”

→土地緊縛への疑問。中世の農民は自由民。農奴という概念がそもそもヨソモノ。

But 段階的発展の考え方は歴史学者の骨に染み付いている

時期区分はなされなくてはならない＝マルクスの発展段階論は参照されなくてはならない

↓

時期区分の時代変化

古代・中世・近世・近現代という区分は社会経済史的な区分。

中世のはじまり

『岩波講座 日本歴史』

1960 年代版 保元・平治の乱[12c 半ば～](愚管抄と同じ区分)

1970 年代版 治承・寿永の内乱[12c 後半～]

} 武士の時代～

政治史的転換→権門体制論(黒田)から、権門としての院権力を重視
 社会経済学的転換→荘園制＝封建制説(戸田・河音)から、後三条代から荘園が増えたことを重視(飛躍的増大は白河～鳥羽代だが、延喜の荘園整理令が契機)

1990 年代版 院政の成立[11c 後半～]

2010 年代版 ”

・武士重視から荘園重視へ＝領主制から非領主制へ＝分裂的から統合的へ

摂関期と院政期連続説(上島亨)

摂関期を中世に含める

政治手法、荘園のあり方、領域型荘園(⇔免田型・飛び地型荘園)への志向に注目

9世紀画期説(村井章介)

中世の思想は9世紀ごろから強まった

- ・ケガレ観(触穢の慣習が発生。神社でのタブーが増加。)
- ・王土王民思想(保元新制に示された排外的意識「九州の地は一人の有なり。王命のほか何ぞ私威を施さん」武者の世となった後も根強く残り続ける)(ケガレ観と結びついて思想地理に反映、天皇の治める天下=聖・清浄/外国=穢 ex.9世紀の新羅との関係)
- ・御霊信仰(平将門、菅原道真などの守護神化)

中世のおわり

『岩波講座 日本歴史』

織田信長の入京[1568]

※秀吉は明らかに中世とは違う近世的権力であるが、信長を戦国大名的と見るか近世的と見るかについては議論が分かれる。そもそも中世のはじまりに比べて議論が少なく、社会経済史の見解が少ない。入京は単なる政治史で、はじまりをマルクス主義的に社会経済史的ポイントに置くこととずれてしまう。

太閤検地=封建革命説(安良城)

※数少ない社会経済史の見解の一つだが、現在では否定。

- ・信長まではむしろ古代的
- ・上記参照

封建制再編成説(中村吉也 他)

前期封建制(分権的封建制)=中世 群雄割拠

後期封建制(集権的封建制)=近世 幕藩体制(藩の自治は認めるが生殺与奪は幕府が握る)

- ・前期後期の区切りはざっくり
- ・1950年代の安良城ショックを挟んで前後で共に有力

3.中世日本の時間的布置 2 (発展モデル)-変化のパターンと速度

変化の階層性…「三層構造」by F.ブローデル

『地中海』(1949)

- 遅 I.地理的な時間[長期持続、長期の歴史]…自然環境の基底性
↓ II.社会的な時間[中期持続、社会史]
速 III.個人の時間[短期持続、出来事の歴史]

※理論としては、レヴィ・ストロースの構造主義に近い。

「自然の中で、人類はちっぽけである」

『物質文明経済・資本主義』(1979 ※『地中海』を世界に拡張・応用)

- i.市場経済…売買、貸借、古くからある商業の形
ii.物質生活・物質文明…自給自足、物々交換
iii.資本主義…競争が生まれ、純粋な市場経済を攪乱する要素を持つ
- } ごく最近まで並行して存在

● I～IIIと i～iiiの関係について、山本淳一(『物質文明～』訳者)の解釈

- iii.資本主義
i.市場経済 } = II.中期持続
ii.物質文明 = I.長期持続

資本主義 — 商業資本主義/M.ウェーバー→ブローデル
— 産業資本主義/マルクス

長い(長期の)16世紀/『地中海』 = 1450~1650の価格上昇期

※not 新大陸からの銀流入による価格革命

物質生活上の様々な発展を助長

この考え方はウォーラステインが「世界経済の形成期」と読み替えて継承

日本史界でも応用される

日本人の時間意識

勝俣鎮夫「バック・トゥ・ザ・フューチャー」 / 『日本歴史』(2007)

	サキ	アト
中世	過去	未来
近世	未来	過去

↓ 17世紀初め～前半
時間観念・歴史認識上の大変化
= 長期持続の言語・精神史に関わる事象

※近世の「アト = 過去」は、用例自体は少ない

柳生の徳政碑文 at 奈良市

「正長元年ヨリサキ^は者^神カン^戸へ四^ケカン^郷カウニヲ^負キメ^目(負債)アルヘカラス」

正長の徳政一揆時に岩に刻まれた(通常は紙の証書として残すため、珍しい)

ここでのサキは過去を指すことが証明された

中世人は過去を見ながら未来に背を向けて歩く ←→ 近世人は未来を見据えてまっすぐ歩く
(過去のことは鮮明にわかるが未来のことはわからない)

cf. 古代地中海人の認識は中世人的 ex. ホメロス

土器 → 須恵器 → 陶器 → 磁器

ex. 炆^{せつき}器 ex. 備前 ex. 瀬戸 ex. 伊万里
常滑 美濃
越前

移りゆく文化と

累積する文化

ex. 法(式目、寺社法、公家法)

→ 自分に都合のいい方を使う

column. 中世の土器^{かわらけ}…宴会の盃、身分に関係ない、使い捨て紙コップ感覚

一度水に通し、口に張り付かないようにして使う

過去に使えるものがあるならば使う。わざわざ新調しない。

→ 転じて外国のものに対する拒否反応も小さい。敢えて国産にこだわらない。

ex. 中国銭(中国)、磁器(中国、朝鮮)…いくらでも入ってくるから自国で作る必要性なし

exc. 後醍醐天皇「改銭の詔」にて「乾坤通宝」「銅楮(銅銭と紙幣と両方を発行)」※実現せず

・合理的。

・政治的にも、朝鮮やベトナムのように国境を接する大国中国を意識して独自性を主張する必要がない気楽な島国。

cf. 天皇制…害をなさないならなくす意味もない。古いものも極力残す。革命が起こりにくい。

野村剛史『話し言葉の日本史』（吉川弘文館,2011）

・言葉において

日本語の変化の速度について

1000-1500年 速 ↓ …書き言葉の普及〈書き言葉の持つ変化の抑制機能〉

1500-2000年 遅 =言葉の原則・枠組みができ、逸脱が抑制される。逸脱も元に戻される。

・国家、社会において

「儀礼」は変化を許さない〈儀礼の持つ社会の安定機能〉

4.中世日本の時間的布置3(周期モデル)-環境史の視点

小氷期=小海退期 / 温暖期=小海進期

環境史が人類史に大きな影響を与えたことには間違いない

世界的な変動

フェアブリッジ曲線

- ・10~11世紀「中世温暖期」=ロットネスト海進

日本では「大開墾時代」(戸田芳実)。フロンティア開発が盛ん。もともと温暖な西日本では干害か。

- ・15世紀「小氷期気候」=パリア海退

日本では「寛正の飢饉」。

山本武夫『気候の語る日本の歴史』(そしえて,1976)

※環境問題への関心が低い時期に先駆的な研究

18世紀後半~19世紀前半「小氷期気候」

日本では「天明・天保の飢饉」

ローカルな変化

フェアブリッジ

- ・100年 ローマ・フロリダ海退

ヨーロッパ北岸…寒冷

地中海沿岸…温暖多雨(亜熱帯気団の北上をせき止めたため)

→ローマ帝国発展・繁栄の基礎

山本武夫

- ・北海道・東北地方の夏季気温



- ・南西諸島の夏季気温

…シーソー関係。一方が高くなればもう一方が低くなる

近年の動向

中塚武

長期変動への不信

- ・PAGS 2K network (Past Global Changes 2 kiloyears network)

…樹木の年輪幅を元に気候変動を復元。一年単位の高分解能。

・年輪セルロース酸素同位体比

…降水量が多いほど比は小さくなる。個体差の影響をほとんど受けない。

隣接個体の多い個体でもデータは取りやすい(日本のような密林など) が、樹齢の影響はある

↓

「フェアブリッジ曲線と日本の事件はまさに偶然の一致」

9~12 世紀 気温が低下してゆく時代

12~15 世紀 気温が乱高下する時代(小刻みなサイクル)

20~30 年間の温暖期の直後に寒冷期 ex. 1230 寛喜の飢饉、1260 寛正の飢饉(冷夏型)

田村憲美

平安時代中後期～鎌倉時代に地球規模の変動期「中世気候異常期」from IPCC 第 5 次評価報告書

世界の 1/3 は温暖だが 2/3 は寒冷。

フェアブリッジと日本の一致は偶然ではなく、フェアブリッジの調査地と日本が同じ 1/3 に入っていた。

※※※日本史界では現在通説とされるが、水曜 3 限惑星地球科学 I の磯崎行雄先生に確認したところ「それは多分何かのウソで、中世が世界的に温暖だったことはほとんど間違いない。IPCC のデータは地球温暖化が人的要因で起きていることを無理矢理証明するために操作が多く査読も入っていないから信用ならない。」

cf.江戸時代前期を中心とする時期「小氷期気候」…氷河の成長の記録より

1991 年小氷期の気候シンポジウムでのアンケート

開始期→①13 世紀(1275±60 年)/②16 世紀(1510±50 年)に二分

終了期→19 世紀(1850±50 年)

①②どちらでも江戸の主要飢饉は収まる。cf.1430 年代の応永の飢饉は温暖乾燥型

中世農業の停滞性

・品種改良

古代の種子札の調査により、中世に生まれたとされていた品種はすでに古代にあるとわかった

江戸初期にある品種もほとんど古代にある

⇒中世での品種改良はそれほど進んでない

・二毛作

そもそも「稲凶作に対する救荒的対応」として始まった

田麦裏作の拡大→作付スケジュールの過密化→湛水期間(米表作)の短縮化・施肥不足→稲減収慢性化

⇒犠牲が大きく、本来は二毛作などやらないほうがいい

季節というサイクル

○「本土寺過去帳」に見える死亡の季節性

千葉県の日蓮宗寺院で、室町～戦国時代にかけて1万人に及ぶ檀家の命日(没年、没日)を記録した資料

2ヶ月グラフ

死者は春から初夏にかけて多く、晩秋から初冬にかけて減る＝江戸時代の天保の飢饉

“毎年春に来る飢え”

秋の収穫が十分でなく、冬は越せるがその先は…という状態が常態化。中世東国の農業生産力の限界。

1ヶ月グラフ

5月の死亡者減少傾向＝夏麦 cf.麦秋とは夏麦収穫期間のこと

第1期 夏麦登場以前

第2期 飢饉時は夏麦も獲れない

第3期 夏麦が平時・飢饉時共に死亡者数減少に貢献



夏麦の意義が高まる

○東大寺領摂津国兵庫北関に残る出荷調整の記録 cf.南関は興福寺領

天安2年(1445)ある20日間を除き1年間の通関情報を記録した資料

通関情報…船籍地、積荷の品目・数量、関銭額(従価税)、納入品目、船頭 or 船主、兵庫の問丸

※年貢は非課税なので全て商品の記録

※従価税がわかるので積荷全体の価格データがわかり、物価データをある程度推測することも可能

※生産地や出荷地は不明。しかし、枅の記録によって大体はわかる。

枅の多様性…中世＝分裂的社会的論拠にも。一つの荘園内でも村毎に違うほど。

一人の領主も、年貢枅・収納枅(でかい)・下行枅など用途によって指定し使い分けた。

収穫時にのみ通関パターン(自然なパターン)

大麦…6月をピークに8月頃まで

米(明石枅)…晩秋から冬(9~11月)

端境期・品薄期にも通関パターン(不自然なパターン)

米(讃岐枅)←主に遠隔地商人(広域を牛耳る者が関与していたとの推測から)による出荷調整

cf.中世日本の労働力は夏に安く冬に高い

→「大工は一日 100 文」など、職毎に賃金が一定値に決まっていたため、日照時間=労働時間が長い夏は相対的に時給が安くなる。よって、夏の方が安く早く建物ができる。しかし、絵巻物などの資料を観察すると、大工は座って、だらだらと仕事をしているようである。

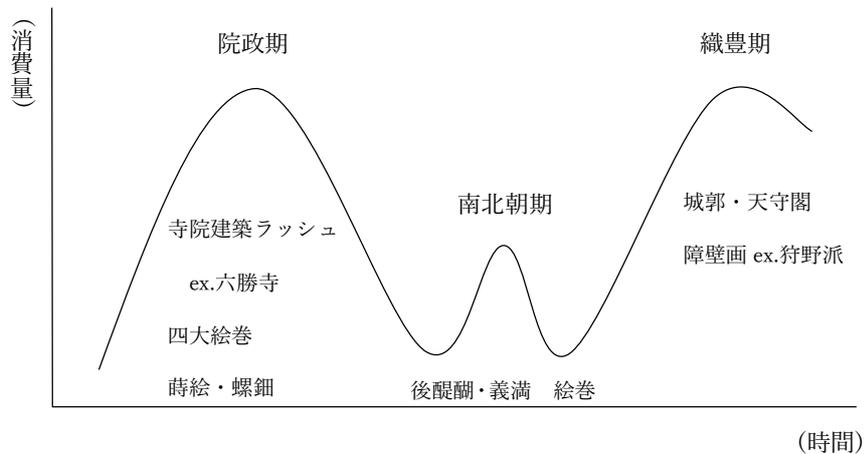
cf.遡って古代には時間給の発想が存在したらしい。律令と共に大陸から輸入。

5.中世日本の時間的布置4(周期モデル)—贈与論の視点

蕩尽と緊縮のサイクル…優れた大建築や美術工芸品は間欠的に出てくる

(どっと湧いて出る時期と全く出ない時期とがある)

ポトラッチ的消費の時代



権力や秩序の交代期・新たな権力秩序の形成期

…自己顕示欲の強い指導者が登場。示威装置としてのポトラッチ。パフォーマンス的・演出が派手・金遣いが荒い(財力で見せつける。相手がお返しをできないほどの贈り物をして打ち負かす)

※技術的にも、パトロンがついている時期の方がピークで、すごい作品が出る。院政期から鎌倉時代にかけては腕が落ちているよう。

権力安定期(二代目以降)には政権は緊縮に転じ、蕩尽を続ければ俗物だと評価を落としかねない。身分相応・場面相応の贈り物が定められていた。ポトラッチは身分的流動性が高い時期=権力移行期にのみ許容される風習。

(安定期、古いものの研究は進む ex.有職故実、源氏物語)

cf.明治～大正の建築(ex.東大本郷キャンパス、日本銀行)にも、海外に対する「見せつけ」の側面がある

戦国～織豊期の合戦の変化も同じ原理

→戦死者激増=合戦のデモンストレーション化。勝つだけでなく、”圧倒的に”勝って見せつける必要。

モース『贈与論』

贈与をめぐる3つの義務

- ①贈る義務(月日、季節)
- ②受け取る義務(拒絶=関係拒否)
- ③返礼の義務(互酬性)

but 室町幕府の「贈与依存型財政」…プリント資料6参照

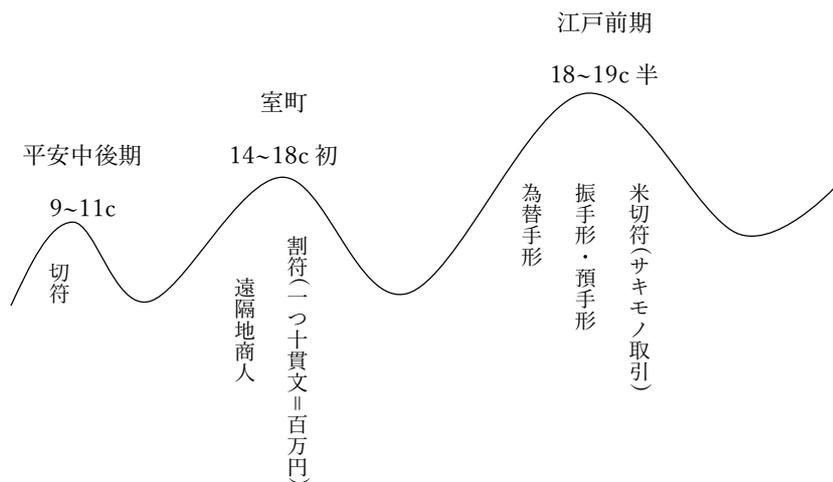
『梅松論』八朔のエピソード

8月1日=八月朔日=八朔の日に贈り物をやり取りする当時の風習

足利尊氏：山のように受け取り、全て来客に配った。

足利直義：意地でも受け取らず、怒って邸に投げこまれた贈り物も丁重に返した。

信用経済の周期性



「時間的布置」シリーズまとめ

歴史は今まで直線的モデルによって捉えられてきたが、周期性を持って捉えることも可能であり、双方の見方を持つことが重要である。

6.中世日本の空間的布置 1—貨幣と国制

中国・中国隣国型国家・辺境型国家

中国…専制国家体制(皇帝権強い・中央集権的)、大きな政府

●銭 = 自鑄、南宋以降は紙幣も発行

中国隣国型国家…中国型専制国家体制(模倣)、大きな政府

ex.高麗、李氏朝鮮、ヴェトナム(、琉球←ゆるい集権制でどちらかといえば含める)

●銭 = 10 世紀以降自鑄 cf.日本ではこの頃古代銭鑄造が終わる

高麗末～李氏朝鮮初期(14 世紀末)や胡朝ヴェトナム(1400~1427←明の征服)では紙幣も発行

- ・ヴェトナムは中国銭も併用
- ・朝鮮半島は一切中国銭を入れない。高麗段階では鉄銭だったが、民間では銀や麻→木綿が用いられ、流通せず。それでも断続的に鑄造。
- ・琉球では「世高通宝」「大世通宝」(第一尚氏王朝末期～第二尚氏王朝初期 = 王権が最も専制化し、周辺を琉球化していた時期。世高と大世は諡号^{しごう})が遺跡から出土。比較的小さいことから、中国の永楽通宝を型にとり、文字だけ書き換えた私鑄銭の一種らしい。

「専制国家体制」「大きな政府」 = 戦時体制

対外的脅威(ex.北方遊牧民、白村江の戦い)を受けて作られるもの。中央や前線にいつでも物資を送り込める体制。

非効率で無駄なコストがかかり、できればやめたい。ex.租庸調、戸籍計帳、都城制

辺境型国家…分権的

ジャワのマジャパイト王国(港市国家)

●銭 = 中国銭とそれを模倣した私鑄銭

日本の場合

古代[律令期]→古代貨幣、古代銭(富本銭 + 皇朝十二銭) = 中国隣国型国家(琉球以上に)

中世 → 中国銭 + 私鑄銭 = 辺境型国家(分権的)

律令を維持する必要がなくなると、大きな政府 = 戦時体制をあっさり脱ぎすてるといふ、国家デザインが大きく変遷した珍しい経験をもつ。

そもそも銭を発行する目的は…

詔書「民衆の利便のため」 本音「兵士と都城建設労働者への支払い手段とするため」
富本銭は藤原京との関係について言われがち。和同開珎が平城京建設目的であることは明らか。
以降の銭も都の維持に関わった。

戦費・大規模公共工事費は一度に大量に支払わねばならないので、金銀では足りなさすぎる。

→銅や鉄の名目貨幣や紙幣(額面価値>素材価値)

特に紙幣は額面価値と素材価値の差が大きいので、政策として成功すれば中央にとって便利になるが、実際は失敗しがち。ex.中世で唯一自鑄について考えた後醍醐天皇は「改銭の詔」にて「乾坤通宝」と紙幣の発行・併用を計画したが計画倒れ。同時代の元ではなく、宋や南宋を目指したか。ちなみに朝鮮半島やヴェトナムの紙幣発行期と同時期である。

cf.高麗や朝鮮の自鑄貨幣には、政治的目的の意味合いが強いとみられる。

中国からの独立性の証として発行→流通のことは眼中にない。

中国銭を採用してしまうと、経済的にのみこまれ、負け。

中国との距離関係が大きく関係しているのでは。

(日本は東南アジア島嶼部との類似性に着目すべきなのではないか)

日本中世の特徴として…

①中世権力は土地を支給し食料は自弁させる。

→短期戦前提で、長期戦には向かない。中世は対外的には基本的に平和(元寇くらいか)、内部での小競り合いが多いだけでそれほど乱世ではなかったのかもしれない。

②首長が大宮殿に住まない。

天皇は里内裏ぐらしが恒常化、武士棟梁も貴族の家+αくらいの規模の住まい。

↓

大戦争・大規模公共工事からの必要なし

銭は中国からいくらでも入ってくる

↓

自鑄する理由が^皆ない

『日本後紀』延暦 24 年(805)12 月壬寅条

「天下の苦しむところは軍事と造作となり。この両事を停めば百姓安んぜん。」(原漢文)

…この提言は直接要因とは言えないが、古代から中世への国家デザインシフトの本質を偶然にも言い当てたもの。実際、日本の歴史はこの言葉通りに動いた。

=小さな国家へ

室町幕府の財政規模の小ささが特徴的(国家予算は5軒くらいの私営の蔵に預ければOK)

当事者主義・夜警国家

ex. 司法 民/刑の境界が不明瞭。被害者から訴え出ないと警察が動かない。

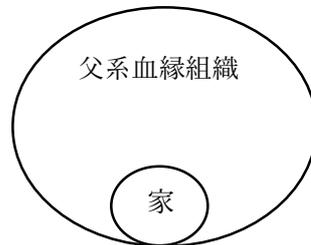
しかも過去の法令や判例の記録が幕府に無く、どの法のどの条に基づいて裁判して欲しいのかまで被害者が言う必要があった。自力救済型社会。

「^{交番前}獄前の死人、訴えなくば検断なし」 cf. 中世ヨーロッパにも同じ意味の諺が存在

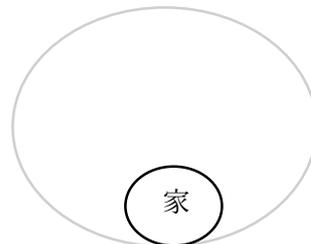
∴ 貨幣発行の観点から見ると、中世日本は分裂的・分権的

7.中世日本の空間的布置 1—家族制度

中国・朝鮮・琉球…父系社会。家よりもさらに広い、上位組織としての血縁組織を持つ。



日本・東南アジア・チベット…双方社会(父系でも母系でもない)。血縁組織がない or ゆるい。



中国

●父系血縁組織 = 宗族

…血縁重視

→同姓(同本)不婚(族外婚)、夫婦別姓(夫妻は別の家族に属す)、異姓不養(ヨソ者を入れない)
本家・分家の概念はなく末広がりになって行く。族譜(家系譜)が作成される。

○家 = 大家族(単に大勢という意味ではなく、兄弟家族が同居。女子は出てゆき男子は原則的に残るのが理想形。旧大陸社会に多いと言われる)

…共有財産、共同会計(同居同財)、均分相続(潜在的な個人の持ち分が存在)

家長は男の代表・調整役にすぎず権限は弱い。男の発言権は平等で大事は合議で決定。民主的。

日本

○家 = 一子残留の直系家族(父→息子の継承線を基盤とし、男子一家族のみ残してあとは出てゆく。長男とは限らず、次男以降や養子でも良い)

…家名・家産・家業の永続性重視(特に家名)

→血縁軽視、同性婚(いとこ同士 OK は珍しい)や異姓養子の容認

財産は家という企業・法人のもので家族のものではなく、分家創設時の財産移植は本家の意のまま。

家長の権限は強い。

天皇家を除けば、家名さえ残って組織が機能し続ければ他人が継いでも良い。

cf. 戦国時代の家の「乗っ取り」

家主・当主を滅ぼしても家名は残し、新当主として征服者側の人間をつくる。ex. 毛利、織田

家臣団としては家名＝働き口が残ることで安心し、反乱が抑えられる。

朝鮮

●父系血縁組織＝門中^{ムンジュン}

…同姓(同本)不婚、夫婦別姓、異姓不養 ※2005年の民法改正にて解消

○家＝一子残留の直系家族

…長男を優遇した男子分割相続

琉球

●父系血縁組織＝門中^{ムンチュウ}

…歴史は浅く、社会的機能も限定的

○家＝直系家族

…朝鮮と同様

鹿児島

○末子同居パターン、隠居分家による世帯分割

…子どもの誰かが結婚すると、両親は未婚の子を連れて別棟に移住する。繰り返し、最後に残った子が両親の面倒を見、両親の隠居用財産を相続し、位牌を受け継ぐ。

cf.

タイ

○未婚同居

南ベトナム

○末子同居

cf.

イギリス・スリランカ

○家＝小家族(両親と未婚の子ども)

坂根説：中国 朝鮮 琉球 日本 鹿児島 東南アジア



・中国から家制度が徐々に普及し、離れるほど異なる形態に変化。

桜井説：中国 朝鮮 琉球 東南アジア 鹿児島 日本



・日本は中国の影響を受けていない。無関係で別原理。

・鹿児島などは家制度が未成立なのではなく、家制度に「のまれなかった」というのが正しいのでは。